

フィン戦争

スターリンの強圧をはねつけた小国の矜持



文=山崎雅弘

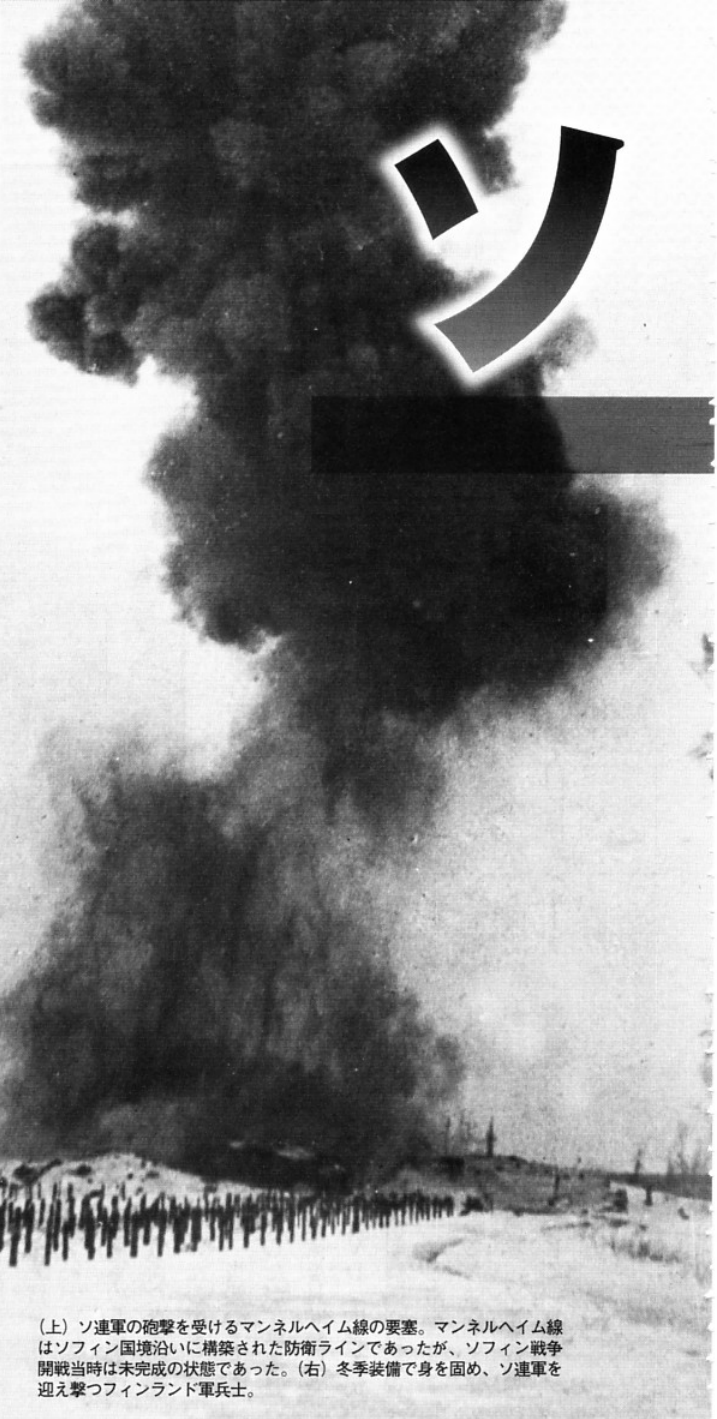
**第二次大戦初期、北欧の小国フィンランドは
強大な隣国・ソ連の軍事侵攻を、その少ない戦力で受け止めた
地形と自然環境を巧みに利用した、フィンランド軍の果敢な戦闘！**

世界を驚嘆させた 小国の抵抗

一九三九年十一月三十日から、計一〇五日間にわたって繰り広げられたソ連⇨フィンランド戦争(ソフィン戦争)は、巨大な軍隊を持つ大国ソ連が、あたかも旧約聖書に登場するダビデとゴリアテのごとく、北欧の小国フィンランドに苦しめられた戦いだった。

第二次大戦の本格化を目前に控えたこの時期に、ソ連が隣国フィンランドを攻撃した背景には、近い将来に予想されるドイツとの開戦に際して、北部の重要都市レニングラードとムルマンスク鉄道の安全を確保しておきたいという思惑が存在していた。そして、ソ連側が提示した、彼らの目から見れば「控えめな」領土交換要求がフィンランド政府に拒否されると、ソ連の独裁者スターリンはただちに軍事力の行使を命令、陸軍力では当時世界最大規模を誇ったソ連赤軍が国境を越えてフィンランド領内へと侵入した。

だが、兵力面で圧倒的な優位に立つはずのソ連軍は、侵攻開始から数日のうちに前進の足を止めることを強いられ、森と雪に覆われた酷寒の戦場を幽霊のように徘徊するフィンランド軍小



(上) ソ連軍の砲撃を受けるマンネルヘイム線の要塞。マンネルヘイム線はソフィン国境沿いに構築された防衛ラインであったが、ソフィン戦争開戦当時は未完成の状態であった。(右) 冬季装備で身を固め、ソ連軍を迎え撃つフィンランド軍兵士。

部隊のゲリラ戦術に翻弄された挙げ句膨大な人員と兵器を失って防勢に転じることを余儀なくされてしまう。最終的には、ソ連側が有利な条件で講和が成立したとはいえ、国際社会での面目が丸つぶれとなったスターリンと赤軍首脳部にとっては、決して内容を誇示できるような戦勝ではなかったのである。

当時、ヨーロッパに駐在していた各国武官の誰もがソ連軍の圧勝を予想したこの戦争において、ソ連軍はなぜ苦戦を強いられたのか。充分な兵器と弾

薬を持たないフィンランド軍は、いかなる戦術を駆使して巨大なソ連赤軍に立ち向かったのか。そして、この戦争の推移は、第二次世界大戦の行方にとどのような影響をもたらしたのだろうか。

ソフィン開戦までの経緯

水面下で始まった領土交換交渉

ドイツ軍のポーランド侵攻から一年半前に当たる一九三八年の四月十四日、フィンランドの首都ヘルシンキにある

ソ連大使館に勤務する二等書記官が、フィンランド外相ルドルフ・ホルステイに非公式な面会を申し入れた。ホルステイは、大使ではなく二等書記官による秘密裡の面会要請という事態に戸惑ったものの、その背後にソ連側の重要な政治的意図が隠されていることを素早く察知して、面会を承諾することにした。

面会場に現れたソ連の二等書記官ボリス・ヤルチエフは、モスクワ（スターリン）からの密命をホルステイに伝えた。

「私は、次のことをお聞きしたい。ドイツがソ連に対して戦争を仕掛けた場合、貴国はどのような態度をとられるか。もし、ドイツが貴国をソ連攻撃の足場として利用するのであれば、わが国は躊躇なく貴国を攻撃するでしょう。しかしながら、貴国がドイツに抵抗するならば、わが国は軍事的・経済的なあらゆる援助を貴国に提供し、戦争終結後には全ての軍隊を貴国から撤収させるつもりです」

ソ連政府が「ソ連に対してドイツが戦争を仕掛けた場合」という仮定の問題を外交交渉の席で持ち出したのには理由があった。当時のフィンランドとソ連の国境線は、レニングラード市の外縁と最も近い場所でもわずか三〇キロしか離れておらず、要港ムルマンスクに通じる重要な鉄道線も、フィンランド領から八〇キロほどの場所を走っていた。

もし万が一、フィンランドがドイツと軍事同盟を締結し、ドイツ軍が同国領内に進駐する事態が発生すれば、レニングラードとムルマンスク鉄道の安全は風前の灯火となることは確実だった。フィンランドの現政権がヒトラーと手を結ぶ可能性は決して高くないと

大戦前のフィンランド周辺



フィンランドはスカンジナビア半島の付け根に位置する国家で、ソ連と長い国境線で接している。ソ連の主要港ムルマンスクとレニングラードを結ぶムルマンスク鉄道はソフィン国境に沿って走っており、フィンランドが反ソ勢力となった場合、この動脈が寸断されることをスターリンは恐れた。ルイバチー半島やカレリア地峡といった要衝を得る代わりに、ソフィン国境沿いの不毛な土地をフィンランドに譲渡するというソ連の提案は、理不尽なものであった。

ンド諸島をフィンランドとスウェーデンが共同で防衛し、ソ連はそれに対して承認を与えるという条項も含まれていた。

だが、この草案に対するソ連側の対応は、フィンランド政府が予想もなかったほど高飛車なものだった。一週間後にソ連側から提示された条件には、対ドイツの中立に加えて、フィンランド領であるオーランド諸島の共同防衛からスウェーデンを外して、代わりにソ連軍を駐留させること、およびフィンランド湾内にも別のソ連海軍の基地を建設させるといった新たな要求が盛り込まれていたのである。

フィンランド政府は、当然のことながらこの逆提案を拒否したが、ソ連側

はなおも交渉継続の意欲を見せ続けた。ヘルシンキ駐在のNKVD（内務人民

委員部・ソ連の秘密情報機関）現地責任者でもあるヤルチエフとホルステイ外相の非公式な接触からちょうど一年が経過した一九三九年春、ソ連側は外務省の公式ルートを通じて「レニング

ラードに近いフィンランド湾内のいくつかの島の租借」と引き換えに、ソ連とフィンランドの国境に接する内陸部の（人家も疎らな）地域をフィンランド側に割譲するという新しい提案を披露した。

この手前勝手な領土交換要求を知ったフィンランド政府のほとんどの閣僚は、過去のソ連側提案と同様、フィンランドの国民感情から考えて到底受け容れられない条件であると判断していた。だが、有力者の一部には、長期にわたる国益を考えれば、ソ連に対して一定の譲歩を与えることは決してマイナスではないと考える人々も存在していた。

国防会議議長（国防相とは別の政府顧問的な役職）としてフィンランド軍の頂点に君臨するマンネルヘイム元帥もまた、そのような対ソ宥和派の一人だった。

懸念 マンネルヘイム元帥の

スウェーデン系貴族の家庭に生まれたカール・グスタフ・マンネルヘイムは、当時フィンランドを領有していた帝政ロシアの騎兵学校に入校し、ロシア軍の騎兵将校として日露戦争と第一

はいえ、国家の急所を危機に晒すリスクを放置することはスターリンの流儀ではなかった。

この面会の席では、具体的な決定は何も行われなかったが、ヤルチエフ二等書記官はこの後もカヤンデル首相やタンネル蔵相と密かに面会して、ソ連側のメッセージを伝達した。フィンランド政府の首脳部は、最初のうちソ連

側の懸念を合理的なものを受け止め、同年八月に「フィンランドは、ドイツがソ連を攻撃する際に出撃拠点を提供しないことを宣言し、ソ連はフィンラ

ンドの現領土を尊重することを約束する」という主旨の条約草案をヤルチエフに提示した。この草案には、対ドイツの中立を維持するため、バルト海北部のボスニア湾の入口に浮かぶオーラ

*NKVD現地責任者＝ソ連の外交官は、通常NKVDなどの諜報機関の人間が兼務している。

The Winter War

次大戦にも従軍していた。ロシア革命直後の一九一八年、ロシアからの独立を宣言したフィンランドの国内で、民族主義者と親ソ派の内戦が勃発すると、マンネルヘイムは民族派の軍勢を率いて活躍し、一九三二年には国防会議の議長に就任した。

こうした輝かしい経歴を持つマンネルヘイムが、こともあろうにソ連側の提示した実質的な領土割譲要求に理解を示すそぶりを見せたことに対し、周囲の人間は大いに驚き、訝ったが、マンネルヘイムの信念は揺るがなかった。ロシアという国家を熟知する彼は、フィンランドとソ連の間に厳然と存在する軍事力や国力の差を冷徹に認識しており、ソ連軍との直接対決が長期化すれば、フィンランド側に勝ち目がないことを充分に理解していた。

しかし、フィンランド政府は結局、ソ連側の提案を拒絶する道を選ぶことになる。「ソ連の要求を呑めば、内閣は総辞職を免れなくなる」という高官の弁明を聞いたマンネルヘイムは、こう嘆いたという。「民族の存亡という問題を鑑みれば、一内閣の人氣など取るに足らないことではないのか」

だが、フィンランド国民の関心は、

一九四〇年にヘルシンキでの開催を予定しているオリンピック大会に向けられており、東の隣国ソ連が繰り出すであろう次の一手に注目する人間は、マンネルヘイムを含め、ごく少数しかいなかった。

フィンランド政府がソ連側の提案を拒絶してから、わずか四か月後の一九三九年八月二十三日、モスクワで独ソ両国による相互不可侵条約が締結され、ヨーロッパの政治情勢は一挙に緊迫の度を深めていった。九日後の九月一日、ドイツ軍の三七個師団が国境を越えてポーランドへの電撃的な侵攻を開始し、九月十七日には東からソ連軍がポーランド領内へと入った。この年の三月二十六日に、ドイツによるダンツィヒ回廊の割譲要求を拒絶していたポーランドは、戦争開始からわずか二七日で首都ワルシャワを失い、その領土はドイツとソ連によって東西に分割併合された。

分け前としてポーランド東部を手中に収めたソ連は、すぐにその北部に隣接するバルト三国（ラトビア、リトアニア、エストニア）へも触手を伸ばした。ド

イツとの間で取り交わされた不可侵条約に付帯する秘密追加議定書において、バルト三国とフィンランドはソ連の勢力圏内に入るとの確認事項があり、スターリンはヒトラーの干渉を全く気にすることなく、これらの国々に対して強圧的な態度で「相互援助条約」の締結を要求した。

九月二十八日、まずエストニアがソ連との条約に調印し、十月二日にはラトビアとリトアニアもそれに続いた。バルト三国の各国には、すぐさま三万人規模のソ連軍が「満足な軍備を持たない友邦国を保護するため」に駐屯を

開始した。

ソ連外相モロトフの最後通牒

この一連の流れを見れば、スターリンのソ連がヒトラー率いるドイツに倣って、周辺諸国への実質的な支配権の獲得に乗り出し始めたことは明白だったが、それでもなおフィンランド政府はソ連に対して強気の姿勢を崩そうとはしなかった。

十月十二日、ユーホ・パーシキヴィを団長とする交渉団がモスクワに招かれ、そこでスターリン本人から次のような内容のメッセージを受け取った。



カール・グスタフ・マンネルヘイム元帥。帝政ロシアの騎兵学校で教育を受け、日露戦争では騎兵将校として参戦した。ソフィン戦争当時、国民や政府の信頼が厚かった彼は、意外にも対ソ宥和を唱えたが、それはロシアを理解した上での冷静な判断に基づいたものだった。

「レニングラードを敵国の海軍力から守り、また陸上での安全を確保するため、わが国はフィンランド湾内の島と同沿岸の陸地の大幅な割譲、およびそれに伴う領土調整を早急に必要としています。よって我々は、ハンコ岬（ヘルシンキ南西）の三〇年間の租借と、レニングラード北方のカレリア地峡の割譲、北極圏のルイバチー半島周辺の割譲を貴国に求めます。その代償として、我々はこれら二七〇〇平方キロの割譲・租借地の二倍以上に当たる五五〇〇平方キロのソフィン国境沿いの地域を、貴国に譲渡します」

一見すると、この交換条件はフィンランド側に有利であるかに見えたが、実体はその正反対だった。ソ連側が手に入れようとするカレリア地峡部には、フィンランド第一の都市ヴィープリ（現ヴィボルグ）をはじめとする都市や街がいくつも存在したのに対し、ソ連側からの譲渡地は人家も道路もほとんどない森と湖だけの未開拓地だったからである。

十月二十一日にヘルシンキの国会で討議を行った後、パーシキヴィの交渉団は二十三日に再びモスクワを訪れたが、彼らの出した答えはスターリンが

望んでいたものではなかった。

「われわれは、そのような領土交換を行うことは望んでおりません」

交渉は完全に行き詰まり、スターリンとモロトフ外相は次第に苛立ちを募らせていった。十一月三日、三度目の交渉も不発に終わると、モロトフは帰国するフィンランド代表団に対して、不気味な言葉を口にした。

「もはや、我々文官では対処できそうにない。次は軍人たちの出番だ」

それから一週間後の十一月十日、ソ連赤軍内部でフィンランド軍の戦闘能力に関する報告書が作成され、十五日には国防相ヴォロシロフの命令でレニングラード軍管区に第9軍と第14軍司令部が創設された。そして、翌十一月十六日、フィンランド国境に展開する第7、第8、第9、第14の各軍に所属する、個々の狙撃兵師団の作戦目標を規定した作戦命令書第0205号が、ヴォロシロフの手で作成された。

一方、ヘルシンキのカヤンデル政権が対ソ交渉でとり続けている強硬姿勢に失望したマンネルヘイムは、国防会議議長を辞任したいという意向を内閣に提出していた。だが、風雲急を告げる事態の推移は、彼の進退伺いに対する

る政府の回答を待つことなく、フィンランド全土を戦争の渦へと巻き込もうとしていた。

十一月二十六日の午後、国境のソ連側にあるマイニラという村に、激しい爆発音が轟き渡った。その直後、ソ連外相モロトフは「フィンランド軍の越境砲撃により、ソ連兵四人が殺害され、九人が負傷した」との声明を行い、ソ連政府は二日後の二十八日、フィンランドとの外交関係を断絶すると発表し、そして十一月三十日午前六時五〇分、ソ連四個軍が南北二二〇〇キロにわたる国境を越えて、フィンランド領内への侵攻を開始した。その数時間後、ソ連空軍のSB爆撃機がヘルシンキ上空に飛来し、市内の



1939年11月30日、ソフィン国境突破の攻撃に出る直前のソ連軍部隊。この写真からもわかるように、冬季迷彩の戦闘服ではないソ連兵士は、フィンランド軍兵士にとって、雪中における格好の標的となってしまう。

主要地点に爆弾と焼夷弾を投下した。戦争回避に失敗したカヤンデル内閣は間もなく総辞職し、銀行家から転進したリュエティ新首相の下で、マンネルヘイムはフィンランド軍の総司令官に任命され、戦争指導の第一線へと返り咲いた。

頓挫したソ連軍の初期攻勢

ソフィン両軍の対峙兵力

総兵力六〇万に上るソ連軍のフィンランド侵攻軍（第7、第8、第9、第14軍）を統括するのは、レニングラー下軍管区の司令官メレツコフ二等軍指揮官だった。最も重要なレニングラー下正面（カレリア地峡）に布陣する、ヤコブレフ二等軍指揮官率いる第7軍には、第19と第50の二個狙撃兵軍団司令部の下、九個狙撃兵師団と三個戦車旅団、二〇個砲兵連隊が配属されていた。

ラドガ湖の北部では、ハバロフ師団

指揮官の第8軍が、第1および第56狙撃兵軍団に所属する六個狙撃兵師団と一個独立砲兵連隊を展開させていた。その北隣の、ソフィン国境の中央部には、ドウハノフ軍団指揮官を長とする第9軍の三個狙撃兵師団が配置され、最北部のムルマンスク正面では、フロロフ師団指揮官の第14軍に所属する二個狙撃兵師団と一個独立砲兵連隊が、フィンランドの港ベツァモに向けて進撃する手筈を整えていた。

ソ連軍の侵攻作戦は、一五〇〇両の戦車と三〇〇〇機の航空機に支援される計画だったが、必要な弾薬の集積は一〇〜二日分の交戦を想定したものに留まっていた。先に提出されたフィンランド軍の戦闘能力に関する報告書によると、同国の軍人は予備役を含めても総勢二六万人に過ぎず、陸軍は九〜一〇個の歩兵師団と若干の旅団だけで、戦車は五〇両、重砲は四八門、航空機も二〇〇ないし二五〇機しか保有していないため、ヴォロシロフは「フィンランドとの戦争は四日ほどで片がつくだろう」と大見得を切っていた。

この報告書に記された敵兵力の算定は、フィンランド軍の実状をほぼ正確に反映していた。開戦時のフィンラン

ド軍は歩兵師団九個と歩兵旅団五個、可動戦車は六〇両で、航空機は一〇四機しかなかったものの、総兵力は正規軍一二万八〇〇〇人と予備役一〇万人、それに開戦直前に動員された民兵が一〇万人の計三三万人だった。弾薬の備蓄量は、小火器用銃弾が二か月分、八一ミリ迫撃砲弾が二日分、他の火砲の砲弾が一九〜二二日分で、航空燃料は一か月分、銃器用潤滑油は二か月分のみが備蓄されていた。

以上のように、ソ連側は正規軍の兵員数で五倍、戦車台数と航空戦力では実に三〇倍という圧倒的な数的優位を確保していた。だが、フィンランド戦線に投入されたソ連軍の将兵は間もなく、戦争の勝敗を決めるのは兵員数や戦車台数などの数値化できる要素だけではないという古来からの戦理を、身をもって知ること

になる。

マンネルヘイム陣地線

ソ連軍の攻勢主力である第7軍は、七個狙撃兵師団と戦車一〇〇〇両を第一線に配置し、フィンランド湾に面するテリヨキと、ラドガ湖畔のタイパレを結ぶ幅六〇キロの正面に向けて攻勢を開始した。



トナカイに轆を引かせて進むフィンランド兵。スキーを履き、白色の冬季迷彩が施された戦闘服を着込んだフィンランド軍兵士たちは、森林地帯で神出鬼没の戦いを展開し、ソ連軍に大損害を与えた。

ソフィン戦争(1939年11月30日~1940年1月)

圧倒的な戦力差という現実には、ソ連軍は短期間での勝利を確信したが、実際にはほとんど戦果らしきものを挙げる事ができなかった。侵攻はソフィン国境全域で行われ、北方ではそれなりの前進を達成したが、カレリア地峡は要衝であることから激戦地となった。この狭い地域に、ソ連軍は2個軍を投入したが、部隊運用のミスや幹線道路の少なさといった要因で、マンネルヘイム線を突破する事ができなかった。



この地区の防衛を担当するフィンランド軍は、エステルマン中将を長とするカレリア軍で、第2軍団(歩兵三個師団)と第3軍団(歩兵二個師団、騎兵四個旅団と警備四個大隊、それに予備の歩兵一個師団で構成されていた。だが、ソ連軍の攻撃が始まると、これらの部隊は国境に近い拠点を捨て、包囲を避けて遅滞戦術をとりながら、国

境から一五〇キロ後方に築かれた陣地線「マンネルヘイム線」へと撤収していった。マンネルヘイム線とは、ロシア/ソ連からの独立後間もない一九二〇年に建設が開始された、全長一四〇キロ、縦深約九〇キロの対ソ防衛を主眼とする陣地の複合設備だった。その大部分は、材木と土盛り、塹壕による掩体壕

で、一部には鉄筋コンクリートの構造物や花崗岩で補強された火点も存在していた。だが、陣地線全体としてはまだ完成には至っておらず、機関銃用掩体壕六か所のうちの四か所は、二〇年代に作られた時代遅れの代物であり、戦車や航空機などの新型兵器に対応する能力は備えていなかった。

国境地帯を難なく突破したソ連軍の大兵力は、かねてからの計画通りに地峡部を北西に向かって前進し、作戦開始五日目の十二月四日には道路と鉄道の重要な橋が架かるキヴィニエミの街を占領した。そして、翌十二月五日までは、マンネルヘイム線よりレニングラード側にあるほぼ全ての地域からフィンランド軍の守備隊は一掃され、カレリア地峡の戦いは第二段階、すなわち「マンネルヘイム線の突破作戦」へと移行した。

ところが、ソ連側はここで予想もしなかった苦戦を強いられることになる。第7軍の作戦目標ヴィープリとレニングラードを結ぶ、最も重要な街道沿いにあるスンマという村では、フィンランド第5歩兵師団の兵士が、十二月十二日から数度にわたって実施されたソ連第19狙撃兵軍団の波状攻撃を、こ

とごとく撃退することに成功していた。ソ連側は、多砲塔中戦車T-28をはじめ、いまだレニングラードの戦車工場で開発途上にあつたSMK(セルゲイ・M・キーロフ)やT-100という新型多砲塔重戦車の試作品を実戦に投入して、敵防衛線の強行突破を図った。しかし、フィンランド側は非力なボフォース37ミリ砲と「カサパノス」と呼ばれる投擲式の対戦車爆薬、そしてスベイン内戦で使用され「モロトフのカクテル」と渾名されていた火炎瓶を駆使してソ連軍の戦車に反撃し、第5歩兵師団は十二月十七日からの六日間だけで五二両のソ連軍戦車を撃破した。

有効な対戦車兵器を持たないフィンランド軍は、その弱点を補うために国立酒造協会の酒造工場をフル稼働させ、計五万本もの火炎瓶を製造して前線に供給した。この火炎瓶の製造は、前線部隊でも盛んに行われ、二万本近い「モロトフのカクテル」が、ソ連軍の戦車に情け容赦なく投げつけられた。これらの安価な対戦車兵器が、恐れを知らない勇敢な前線兵士の手で活用された結果もあって、カレリア地峡を巡る攻防戦の全期間を通じて、計二三九両のソ連戦車が破壊され、さらに一二両が

The Winter War

可動状態でフィンランド軍に捕獲された。

フィンランド軍の 包囲(モッティ)戦術

ソ連軍の戦車部隊が、カレリア地峡で大損害を被った背景には、随伴歩兵との進撃速度の違いから戦車と歩兵が分離したために、歩兵の追従を待たずに戦車を単独で敵陣に突入させるという戦術上の大きな不手際が存在していた。だが、意気揚々とフィンランドに足を踏み入れたソ連軍將兵にとつての本当の苦難は、まだ始まったばかりだった。

撤退するフィンランド軍が全ての木造建築物を焼き払ったため、ソ連軍の各部隊は夜間に暖をとって休息できる宿舎が得られず、仕方なく野営して焚き火を起こした。しかし、この明かりはフィンランド軍にとつては格好の攻撃目標となり、小規模な襲撃班と数少ない航空機による夜間空襲で、ソ連兵は肉体的にも精神的にも少しずつ消耗していった。

また、ラドガ湖以北の戦線では、利用可能な道路が極端に少なかったためソ連軍の侵攻部隊は一本の道路に沿った行軍隊形での進撃を余儀なくされた

が、補給段列も含めると一個師団あたりの総延長は一〇〇キロにも達していた。フィンランド側は当然のことながら、側面の防御を欠いたこれら敵部隊に対して神出鬼没の奇襲攻撃を繰り返し、あたかも相手選手だけに目隠しをしたボクシングのように、敵の弱点にボディブローを打ち込み続けた。

こうした一方的な戦いの典型例が、フィンランド中部のスオムツサルミ周辺で繰り広げられた激戦だった。フィンランドの国土がくびれた箇所東端に位置するスオムツサルミの背後には、南北を結ぶ街道がただ一本しかなく、ボスニア湾岸の街オウルでこの街道を遮断されたならば、国土の北半分は文字通り「窒息」状態に陥ってしまう可能性が高かった。しかも、スオムツサルミの正面にはフィンランド軍の一個国境警備大隊しか布陣しておらず、いったん戦線を突破されたら敵の進撃を阻む術は存在しないものと思われた。

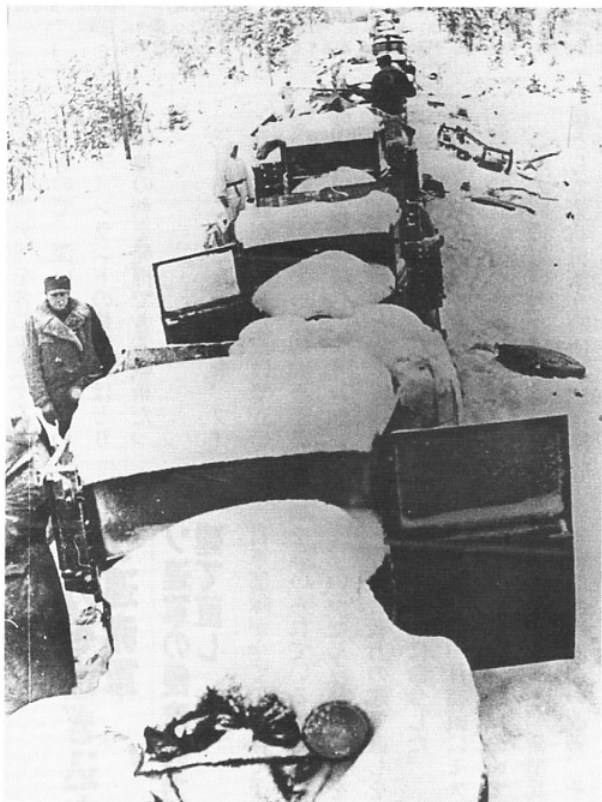
このためマンネルヘイムは十二月七日、シーラスヴォ大佐を長とする第9歩兵師団の新設を決定し、隣接地域の師団から抽出した歩兵

二個連隊をスオムツサルミへと向かわせた。

十二月九日に戦場付近へと到着した同師団の歩兵第27連隊は、スオムツサルミと国境の村ラーテを結ぶ三六キロの街道に標的を絞り、十一日からソ連軍に対する牽制攻撃を行って、敵の進撃を停止させることに成功した。この地域を担当するソ連軍の第163狙撃兵師団は、支援戦車を使ってフィンランド軍の襲撃に対抗しようとしたが、ヘビのように細長い隊形で道路沿いに布陣

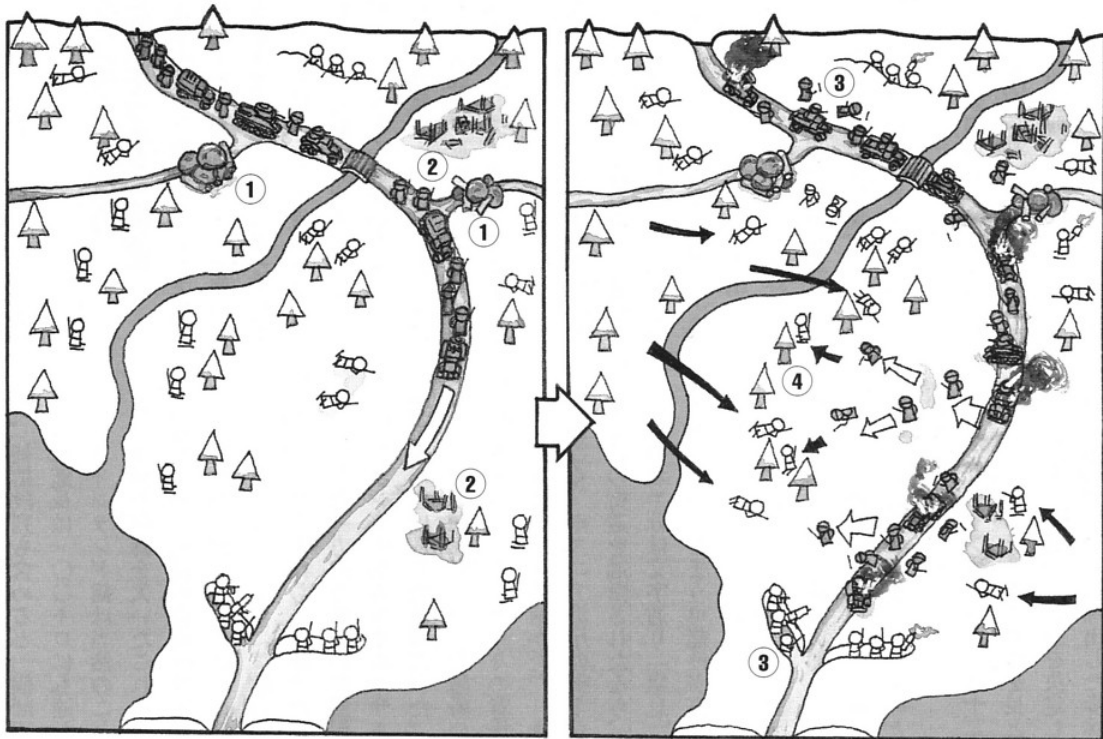
している状況下では、スキーや橇そりを駆使して側面からゲリラ攻撃を敢行する敵に対し、有効な反撃を行えるはずもなかった。

そして十二月二十七日、フィンランド第9師団の第27連隊は「モッティ戦術」として世界中に知られることになった。ソ連第163狙撃兵師団に襲いかけた。モッティ戦術とは、脆弱な縦列隊形で展開する敵軍を両側から奇襲攻撃して、いくつもの小さな包囲環(モッティ)に封じ込め、孤立して弱体



スオムツサルミの戦いで撃破されたソ連軍のトラック部隊。道路を縦列で移動していたのがわかる。こうしたソ連軍の縦列に対し、フィンランド軍は「モッティ」と呼ばれる戦術で次々と撃破していった。スオムツサルミの戦闘は、モッティ戦術の典型例であった。

フィンランド軍のモッティ戦術



モッティ戦術の基本は、敵の長い縦列を寸断し、各々を小さな包囲(モッティ)に置いて殲滅することであった。だが、それ以外にも、作戦を成功させ、逃げたソ連軍を不利な状況に置くための工夫がされていた。①主要道路の脇道を、岩や樹木で塞ぎ、敵の行動を制約する。②周辺の村や建物は、生き残ったソ連兵に利用されないように焼いておく。③縦列の最後部と先頭を攻撃し、動きを止める。あとは長い縦列を随所で切断し、個々に包囲していく。特に敵が持っているテントや夜具、寝具などを優先的に狙う。④反撃に出る敵を、森林地帯で迎え撃ち、殲滅する。(イラスト=熊田洋司)

化したモッティを各個撃破するというもので、深い森林と雪に覆われたフィンランドの地形ではとりわけ地の利を発揮できる戦術だった。

三日間にわたる激戦の末、フィンランド側が確認しただけで五〇〇〇人の兵士を失った第103狙撃兵師団は事実上壊滅し、フィンランド第9師団は戦利品として戦車一両と野砲二五門、そして貴重な輸送手段であるトラック一五〇両と馬匹二五〇頭を獲得した。

この大敗に驚いたソ連側は、増援として第44狙撃兵師団を同地区に送り込んだが、フィンランド軍はスオムツサルミ周辺に巧妙な罠を仕掛けてこの追加兵力を迎え撃ち、一九四〇年一月五日にまたしてもモッティ戦術で大反攻を開始。第44狙撃兵師団は到着から数日のうちに壊滅的な損害を被って国境へと敗走していった。

「四日ほどで片がつく」はずだったソ連軍のフィンランド侵攻は、物量面での劣勢を創意工夫で補うフィンランド側の巧みな対応により、完全な泥沼状態へと陥ったの

である。

全力を注ぎ込むソ連赤軍

ソ連軍の侵攻兵力 建て直し

自軍部隊が全ての戦線で予想外の苦戦を強いられているのを見たスターリンは、いったん攻勢の中止を命令し、敗因分析と戦力の建て直しを図るよう赤軍の上層部に命令した。

一九四〇年一月初頭にモスクワで開かれた中央軍事会議において、現地部隊の指揮系統刷新と、新型兵器の投入、冬季戦の戦術面での改善、そして重砲支援の強化が決定され、一月七日付で「北西方面軍司令部」と呼ばれる野戦司令部が創設された。

これは、カレリア地峡の突破部隊である第7軍と、同地に増援として送り込まれた第13軍(グレンダリ二等軍指揮官)の両軍を統括する上級司令部で、司令官にはテイモシエンコ一等軍指揮官が任命され、それまで統括指揮をとってきたメレツコフは第7軍司令官に格下げされた。

また、ラドガ湖北方の第9軍司令官ドゥハノフが更迭され、後にスターリ

The Winter War

ングレード防衛の英雄となるチュイコフ軍団指揮官と交替したのをはじめ、作戦失敗の責任を問われた何人もの師団長が解任され、より実戦指揮の能力に長けた新たな指揮官が登用された。そうした新進指揮官の中には、翌年六月の独ソ開戦時にキエフ特別軍管区の司令官を務めることになるキルポノス師団指揮官（第70狙撃兵師団長）の姿もあった。

北西方面軍配下の第7軍と第13軍は、それぞれ狙撃兵師団数を二個と一三個に増強され、両軍を併せた兵力数は約六〇万人、戦車台数は約二〇〇〇両（装甲車含む）で、これにはメレツコフからの要請でマンネルヘイム線突破用に設計された、一五二ミリ榴弾砲搭載型の重戦車KV-II型も四両含まれていた。

また、支援砲兵の数も大幅に増強され、計二五個砲兵連隊の四〇〇〇門が狭い地峡部に集結し、車輪が接するほどの密度で前線背後に展開した。さらに、航空支援の空軍力も七五〇機近くが用意されたが、一部の機体にはこれも開発されたばかりの八二ミリ対地口ケット弾が搭載されていた。

戦術面では、白い雪原で兵士たちを

暗緑色の外套姿で戦わせたそれまでの方針を反省し、雪上での偽装や戦車に牽引させる櫓（搭乗した狙撃兵を戦車に随伴させる）の活用法についての研究が行われた。銃火器用の凍結防止剤もそれまでより大量に配布され、前年末の一月間の戦いで露呈したソ連軍の弱点は、ほぼ完全に解消されることとなった。

英仏両国の介入計画

このように、スターリンが対フィンランド戦争の早期終結に向けて赤軍組織の改善を急がせた背景には、北欧諸国を巡る国際情勢の急変という政治的な理由も存在していた。彼が潜在敵国であると見なして警戒する英仏両国が、ノルウェーとスウェーデン経由で、フィンランドへの救援部隊を派兵しようとして画策していることが判明したのである。

ソフィン戦争が勃発した三九年十一月当時、英仏両国はフィンランドに対して冷淡な態度を示しており、十二月十四日付でソ連が国際連盟から除名された後も、英仏合わせて四二機の航空機をはじめとする若干の武器弾薬を提供しただけで、正規軍の投入を前提と

する積極的なフィンランド救援策をとろうというそぶりは見せなかった。当時の英仏両国は、直接の敵であるドイツの一手一投足を注視しており、自国の国益と直接の関わりがないフィンランド情勢には、さほどの関心を抱いていなかったからである。

ところが、イギリスのチェンバレン内閣で海軍相を務めていたチャーチル（後の首相）が、次のような提案を行ったことにより、英仏両国政府の態度は大きく揺らいだ。

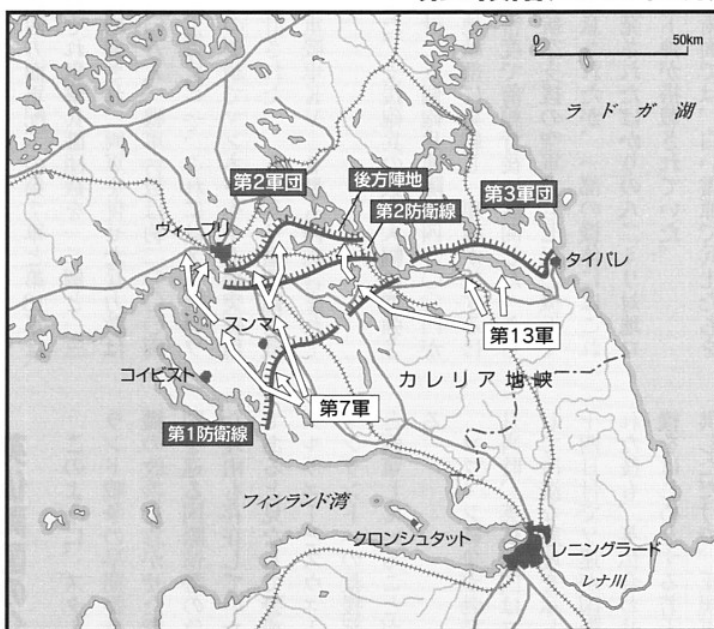
「フィンランドを支援する軍隊の領内通過という名目で、英仏両軍の地上部隊をノルウェー領のナルヴィクからスウェーデン北部に進出させてはどうか」

当時、スウェーデン北部のキルナとい



第2次の攻撃において、砲撃で粉碎されたフィンランド軍の防御ラインを突破するソ連軍兵士。第1次攻撃で露呈した自軍の欠陥を速やかに是正したソ連軍は、満を持して再攻撃を行った。

第2段階(1940年2月)



再開された攻撃において、ソ連軍はフィンランド軍の遅滞戦術をものともせず圧倒的な物量でひた押しした。ソ連第7軍はマンネルヘイム線を突破し、重要都市ヴィープリに到達、戦いを決定づけた。カレリア地峡は突破されたものの、依然として首都ヘルシンキは健在で、他の地域も多くのフィンランドの手にあった。だが、余力をすり潰すことを恐れ、フィンランドは停戦を選択した。

--- : 国境
 ——— : 主な道路
 : 主な鉄道
 [] : マンネルヘイム線
 [] : フィンランド軍
 [] : ソ連軍
 [] : ソ連軍の進撃

エリバレの鉄鉱山では、年間一五二〇万トンの鉄鉱石が産出されており、英経済戦争省による見積もりでは、うち九〇〇万トンがドイツに、二五〇万トンがイギリスに輸出されていた。もしイギリスが、これらの鉱山と、搬出港であるノルウェーのナルヴィクを制圧すれば、ドイツの軍需経済は生命線である鉄鉱石の輸入ルートを断たれて大

打撃を被ることになる。二月五日に開かれたフランスとの首脳会議の席上、北欧三国への派兵方針を固めたイギリス政府は、二日後の二月七日に具体的な侵攻計画を立案するよう統合幕僚会議に命じた。英仏両軍が合同で作成した計画案によれば、総兵力は一〇万人で、ノルウェー全域とスウェーデン北部の鉄鉱山、そしてフ

インランド北部が作戦地域に含まれていた。

英仏両国による北欧三国への派兵が実現すれば、ドイツもこの戦争に参加してこころは確実だった。小国への領土割譲要求が大国間の全面戦争へと発展することを危惧したスターリンは、マンネルヘイム線に対する総攻撃の開始をテイモシエンコに急がせた。

マンネルヘイム線の突破

一九四〇年二月一日、マンネルヘイム線に対する総攻撃に先立ち、ソ連軍爆撃機による大規模な空爆が開始された。五日後の二月六日には砲兵による集中的な弾幕射撃が始まり、二月十日までの五日間にわたって昼夜を問わず砲撃を繰り返した。一日の投弾量は最大で三〇万発に達し、五〇〇機近い爆撃機がマンネルヘイム線の上空に飛来していた。

連日の猛爆と並行して、地上部隊による限定的な攻撃が数か所で実施されたが、これらは敵情の調査を目的とする威力偵察であり、総攻撃の開始は二月十一日と定められた。二月三日、テイモシエンコは第7軍と第13軍に詳細な攻撃作戦の計画書を下達し、それぞ

れ地峡部の西と東を並列で進撃する手筈となっていた。

二月十一日の午前八時四〇分、二万二〇〇〇発の砲撃支援と共に、ソ連軍による総攻撃の火蓋が切られた。地峡部を守るフィンランド第2および第3軍団の防衛態勢は依然として頑強で、ソ連軍の攻撃部隊は前年と同様に戦力を磨り減らしながらの前進を余儀なくされたが、テイモシエンコは損害を被った師団をすぐに後方で待機する別の師団と交替させ、兵員の損害と引き替えに、フィンランド軍の防衛陣地に対する圧力を加え続けた。

損害比率では勝っているとはいえ、人的資源で圧倒的な優位に立つソ連軍が意図的な戦術として消耗戦を挑んできたことにより、小国フィンランドは次第に断崖へと追い詰められていった。二月十三日から十四日にかけて、マンネルヘイム線に近いヴィープリでは高校生による学徒大隊が編成されたが、ヴィープリ南方の激戦地スンマではすでに予備兵力が底を尽いており、街道を守る拠点の維持は絶望的な状況となつた。二月二十七日、マンネルヘイムは前線部隊を最終防衛線へと退却させるよ

The Winter War

う、配下の軍団長に命令を下した。翌二十八日、彼はフィンランド軍首脳を集めて会議を開き、和平の必要性を将軍たちに説明した。

「和平交渉というものは、戦える戦力がまだ残っているうちに行ってこそ意味がある。英仏両軍が到着するのは、早くとも四月五日のことだが、わが軍がそれまで現状を維持することはきわめて難しい。全ての戦力を失ってからは、もう遅い。その時には、相手に対する全面的な屈服しか道は残されていないからだ」

二月二十八日、ティモシエンコは最後の大攻勢を前線部隊に命じた。パヴロフ軍団指揮官率いる北西方面軍の予備機動集団が、凍結したヴィープリ湾を渡ってマンネルヘイム線を迂回し、敵防衛線の背後への進出に成功すると、要衝ヴィープリの陥落は時間の問題となった。三月三日、ソ連軍がヴィープリの包囲戦を開始したのとほぼ時を同じくして、三月八日からソ連とフィンランドの両国政府による停戦交渉が始まった。

前線での苦境を知ったフィンランド政府の閣僚たちは、マンネルヘイムが提唱する「国家存続のための和平受諾」

の要請を渋々ながら了承し、ソ連側の要求をおおむね受け容れる形での事態收拾に動き出した。そして三月十二日、フィンランドのカリオ大統領がモスクワで和平条約の文書に署名し、翌三月十三日の午前十一時をもって両軍部隊が停戦するとの取り決めが成立した。ソフィン戦争は、多大な血の代償を支払ったソ連側の実質的勝利と共に、その幕を閉じたのである。

ソフィン戦争がもたらしたもの

赤軍首脳部が得た 苦い戦訓

フィンランドは、この戦争で二万四九三三人の戦死者と四万三五六七人の負傷者を出し、和平条約の議定書に基づいてカレリア地峡とラドガ湖北西部、ムルマンスク鉄道に近いクオラヤルヴィ地区、そしてバレンツ海沿岸の半島地域をソ連に割譲した上、フィンランド湾に突出するハンコ岬の三〇年間にわたるソ連への租借協定にも調印させられた。

国土の一部を失ったフィンランドは、翌年六月に実施されるドイツ軍の対ソ攻撃開始とタイミンクを合わせて、失

地回復のための「継続戦争」を開始することになるが、マンネルヘイムはフィンランド軍をドイツ軍と共闘させることは最後まで拒絶し続けた。

一方のソ連側では、戦死者と負傷者を合わせて四万八〇〇〇人という数字が外務省から発表されたが、現地に特派員を派遣して戦場の実相を見ていた西側諸国はこの数字を全く信用せず、ソ連軍の死傷者は二〇万人に達するだろうと推測していた。そして、ソ連邦崩壊後の一九九三年、ソ連軍の各戦役における損害の実状を記した資料集が公刊され、ソフィン戦争の全期間中におけるソ連軍の戦死者と病死者の合計は八万四九九四人、負傷者は二四万八〇九〇人、合計すると三三万三〇八四人とい

三三万三〇八四人とい



停戦協議に赴いたフィンランド軍の軍使(右)とソ連軍軍使(左)。巧みな防衛戦を展開したフィンランド軍だったが、最終的にはマンネルヘイムの危惧していたソ連の物量の前に膝を屈した。だが、ソフィン戦争の結末は、以後のヨーロッパ大戦の推移に少なからぬ影響を与えることになった。

う恐るべき数字が提示された。

世界有数の軍事大国であるはずのソ連が、小国フィンランドを相手とする限定戦争において、これほど凄まじい損害を被った最大の要因は、一九三〇年代の後半にスターリンが断行した赤軍幹部の大粛清にあった。元帥や将官はもちろん、師団長や連隊長レベルでも深刻な人材不足に陥ったソ連軍は、実戦経験のない肩書きだけの「師団指揮官」や「軍団指揮官」に部隊の指揮を委ねたが、戦車と歩兵の効果的な連携や、地形に応じた前線部隊の展開法、冬季戦における戦術上の要点など知らない彼らは、無造作に配下の小部隊を戦場に投入し、人的損害と兵器の損失を饅登りに上昇させてしまった。

戦争終結から一か月後の四月十四日から十七日にかけて、クレムリンの一室に赤軍の全首脳部が召集され、ソフィン戦争で露呈した自軍の戦術面および兵器面での弱点についての徹底的な検証と、それに基づく改善提案が行われた。とりわけ重視されたのは、フィンランド軍の戦術を手本とする冬季戦の戦訓で、スキーや橇を使った機動的な部隊運用や、冬季迷彩の効果、軽快な短機関銃や対戦車ライフルの有効性

などが議論され、また既存戦車の弱点を踏まえた新型戦車の開発構想や、砲撃支援の改善案なども論じられた。

ドイツと 英仏両国への影響

ソフィン戦争の顛末は、当事国のソ連とフィンランドはもちろん、当事国でないドイツとイギリス、フランスの国家戦略にも大きな影響を及ぼすこととなった。

この戦争の期間中、ドイツは一貫してソ連側に立つ姿勢をとり続けた。一九三九年十二月十日、ヒトラーは先に締結した不可侵条約を尊重し、バルト海で活動するソ連海軍の潜水艦に対して、燃料や食糧の供与を行う許可をドイツの商船に与えていた。また、イタリアがドイツ経由でフィンランドに送ろうとした援助物資を、ドイツ当局が国内で差し押さえて留置したため、独伊関係が一次的に緊張するという事態も引き起こされていた。

このような独ソの協調関係を見た英仏両国は、フィンランド救援の名目でスウェーデンの鉄鉱石を押さえる道が断られた今、ドイツの戦争経済に打撃を与えるには、重要な石油供給源であるソ連のバクー油田を爆撃すべきだと

する構想を練り始めていた。三月二十一日以降、国籍マークを消した英空軍機がバクーとその周辺に対する偵察飛行を行い、四〇年四月頃からはフランスの中東軍司令官マキシム・ウエイガンの下で、具体的なバクー爆撃計画の立案作業が進められた。ウエイガンの計算では、バクーとコーカサスの石油施設に対する爆撃作戦は六月下旬から七月下旬には決行できるはずだった。

一方、英仏両国の北欧派兵構想が明るみに出たことで、ヒトラーはスウェーデンの鉄鉱石という自国のアキレス腱を敵に教えられる形となり、この弱点を解消するための軍事作戦計画がただちに立案された。ソフィン戦争の停戦から二六日後の四月九日、ドイツ軍はノルウェー全土に対する電撃的な侵襲作戦を開始し、スウェーデンの鉄鉱山への「勝手口」に当たるナルヴィク港を支配下に置いた。

先手を取られた英仏軍は、四月十四日から十八日にかけて、ノルウェーへの派兵を実行したが、彼らに与えられた時間はわずかしかなかった。ノルウェー侵襲から一か月後の五月十日、ドイツ軍は西部戦線で大攻勢を開始してベネルクス三国を席卷した後、六月十

四日にはパリへの入城を果たし、フランス政府は六月二十二日にドイツとの休戦条約に調印した。五月十日にイギリスの新首相に就任したチャーチルは、バクー爆撃計画を放棄し、ドイツとの戦争に全ての軍力を投入する方針へと国家戦略を切り換えていった。

こうした一連の出来事を振り返ると、スターリンが些細な理由で始めたソフィン戦争は、ドイツと英仏両国の間で辛うじて均衡していた軍勢力の天秤を大きく傾かせ、西部戦線での新たな大規模戦争を早める結果をもたらしたと見ることも可能である。

だが、ソフィン戦争がドイツに与えた影響はこれだけではなかった。対フィンランド戦争における赤軍部隊の無様な戦いぶりを見たヒトラーとドイツ軍首脳部は、彼らの戦闘能力が予想以上に低いことに驚き、ソ連軍に対する失望と能力軽視の印象を脳裏に強く刻み込んでしまう。

そして、一年後の六月二十二日に開始される対ソ侵襲「バルバロッサ作戦」において、ドイツ軍の将兵は、ソフィン戦争では見られなかった「ソ連赤軍の底力」を、広大な戦場で目の当たりにすることになるのである。